

博士・教授は神か

——土木工学は自然と環境を破壊した

——人間の愚劣——弊害の多い博士教授制度は日本が世界に魁て廃止せよ

井上達明建築事務所 正会員 井上達明

§ 1 修身齐家治国平天下

修身齐家治国平天下という言葉がある。己の心と体を厳しく修練して初めて家庭内が整い、家庭内の整っている者にして初めて国を治め天下を平らかにすることが出来るという意味である。金持ちの娘は往々にして結婚生活がうまくいかないことがあるようだ。金持ちや偉い人のお嬢さんということで親も本人も十分に身を修めさせることが出来なかったのではないか。次に、ある博士・教授の娘について、この娘は結果的には**破鏡**の憂き目にあうが、一般に教授の娘といえば、父が**他人を教え導く**位であるから、自分の娘は外形的教育は勿論、内面的にも十分躡けてあると思われがちだが、教授自身の**人間修養の無さ**、又、娘の——これは今日よくあることだが、心理学でいうエレクトラ・コンプレックス(父と娘が心理的、情緒的に**親離れ子離れが出来ない状態**のことを言う)の父離れの出来ない状態が結婚後数十年続き、父と謀って夫に無断で胎児を墮胎する、又同じく、夫に無断で避妊リングを子宮に挿入する。果ては、父と謀って子供総てを連れて雲隠れする。零細企業を経営する婿が、後になって知る事であるが、この日本の社会で博士・教授は尊敬され、しかもかなりの高給取りであるにも係わらず、**民間人**はその数倍の所得があるものと邪推して、婿を心理的に追い詰めれば、婿は有り金を吐き出す筈だという戦略であった。婿は**精一杯の金額**を毎月妻に手渡していたのであるから、どうしようもない。この博士・教授の娘離れの出来ない心理と、娘共々全く不可能な**経済的要求を貫徹**する為、父と娘が相謀って非人道的なことをした例である。そして周知の事実であるが、敗戦後東京大学総長を務め、第二次大戦後の講和条約締結に当たり、全面講和を唱えて、部分講和をしようとする吉田茂首相と対立し、「**曲学阿世**」と叱責された**南原繁**(1889-1974)であるが、彼は博士号の**有害無益**なことを知っていて、博士号は取らなかった。又、文豪・**夏目漱石**(1867-1916)は、文学博士を与えるという東京大学当局に対し**文学博士返上**を申し入れ、この遣り取りは彼の死ぬ迄続いた。

§ 2 土木工学と土木技術が川・海岸・干潟、そして森をも死なせた罪——杞憂はあるのだ

杞憂とは、中国の杞の国の人々が**天が崩れて落ちる**ことはないかと心配したという故事で、取り越し苦労のことであるが、太陽も後 40 億年位で燃え尽きるのであるから、天も地もやがて無くなることは科学的事実である。学者や技術者達が**自己変革**から逃亡せず、**抜本的にその考えを改めない限り**、筆者は何億年とは言わず、この百年、そしてこれからの百年二百年、土木工学が自然と環境を破壊し、人類は森の木々や動物と共に**絶滅**すると信じる。先年筆者は九州宮崎県の椎葉村を訪れ、九州電力の**上椎葉ダム**及びその下流の**耳川**をつぶさに観察する機会を得た。上椎葉ダムは九州電力の水力発電用のダムであり、椎葉村は補償金と毎年の固定資産税を得ている。上椎葉ダムから東の日向灘に向かって幾つかの支流を合わせて流れる**耳川**は、直線距離約 50 km、耳川の蛇行に沿って測ると 70~80 kmはあろうか。日向の約 10 km南、美々津で日向灘に注ぐ。河口迄は行けなかったが、季節は秋、日本列島の内でも雨量の多い九州の山地なのに、中流にも下流にも幾つものダムが設けられているせいか、流れは貧しく、全体の**印象として干上がった川の中程に、漸く流れ**があるように見え、二級河川の耳川(宮崎県が管理)に相応しいような魚はいないように見受けられた。又、筆者は小学校時代より先生に連れられて甲子園浜へ毎年行ったものである。戦後、**あの美しかった甲子園浜**は巨大で黒々としたコンクリートの防潮堤がそびえており、海水浴どころではない。その後、**六甲アイランド**そして**ポートアイランド**なる**巨大埋め立て**が行われ、その上、**神戸空港**なる怪物が市民・県民・国民の反対を押し切って、工事が着々と進められている。**大阪湾は瀕死**の状態である。関西 3 空港(いや、但馬空港及び

修身齐家治国平天下、博士の愚劣、環境破壊、心の師、持続可能、論文合格者

〒555-0011 大阪府大阪市西淀川区竹島 3 丁目 7 番 4 号、電話：06-6478-1028、FAX：06-6478-1026

計画中の琵琶湖空港を入れて5空港?)で必ず**大航空機事故**が起きる。

§ 3 木を見て森を見ず——国亡びて博士と公務員栄えるか？

天候も人口も経済も何れも人間の手では思うようには出来ない。アダム・スミス(1723-1790)の「国富論」及びケインズ(1883-1946)の「金融についての理論」も、今日の世界経済及び日本経済には当てはまらない。新しい経済学、日本流ならば「**始末(節約)の経済学**」等を打ち立てなければならない。インドのセン教授は1998年度、不平等を無くす経済学でノーベル賞を得た。幕末財政破綻を来した米沢藩に九州より婿入りした若き藩主**上杉鷹山**(1751-1822)は**節約と勤勉**で経済を立て直した。今日**国と自治体の借金**は**天文学的数字**であり**大インフレか大増税**以外は出口が見当たらないのに、政治家達はこの事を国民の目から隠している。土木学会の博士や教授達も**専門以外のことは考えたことがなく愚かな為政者の走狗**となり、土木工学の或博士は土木学会会長在任当時「大借金でも国民からの借金だから一向に構うことはない」と嘯いた。即ち木を見て森を見ない獵師と同断である。国が滅びて博士と公務員だけが生き残れるとでも思っているのだろうか。

§ 4 心の師となれ、心を師とするなかれ(大般若涅槃經)

心は、**良い心**もあるが**私利私欲・自己中心**(じこちゅう)に走る心もある。そこで吾人は我侘な心をコントロールする師となるべきで、我侘な心のままに突っ走る即ち心を師としてはいけない、という教えが大般若涅槃經にある。筆者の論文「大泉一貫教授のジャーナリスティックアカデミズムを聴いて」(日本建築学会2000年全国大会発表論文)で、彼は**学界の宿阿**を剔抉している。即ち学者達は年齢と共に勉強が疎かになり、自分の専門領域についても、同じ意見の繰り返しとなる。**人事権を握り**、本人も周りも**長幼の序にどっぷりと浸かり**、学問についてそれぞれの意見を徹底的に追及する自由討論が行われず、このようなアカデミズムは今や**構造腐敗に陥っている**、と批判した(NHKラジオ第1放送、2000年2月8～10日)。耐震設計に今も用いられる震度について、「0.2」(実は仮説)という値は、戦後数十年大学でも「水1ccは1g」といったまるで定数であるかのように**確かな数値**として教え込まれた。1995年の阪神大震災以後、1998年の建築基準法大改正においても同法施行令88条第2項には未だに「標準剪断力係数は0.2以上」として温存されているが、土木学会では「何故か有る、その内にやめます」と答えている。日本建築学会では、構造専門家の内一部の頑迷な者は**頼被り**を通そうとする。京都大学教授 井上一朗に至っては、筆者の「0.2廃止を宣言し、謝罪せよ」という主張に、「**教えてやる！新耐震はOKなのだ**」と一喝した。諸宗教の融和を図り「共生への道をさぐる」という講義をしている高尾利数は、ゴータマ・ブッダ、イエス・キリスト、そしてムハンマド等の教えを、後世の**教団官僚**が、その権威の為に色々な捻じ曲げ、**瞞し**を作ったという。高尾は、キリストの行った奇蹟や、又復活についても、或る著名日本人神学者が「**史実ではないが真実である**」¹⁾と言ったと批判している。井上一朗の言葉もこの神学者の類であり、彼等一部の構造専門家は、「**0.2は実績だ**」とまるで**既得権利**のように言うが、これこそ今流行の食品詐称、即ち文字通り「**羊頭狗肉**」[羊頭を懸けて狗(いぬ)肉を売る]の建築学会版である。博士・教授達は「ゴメンナサイ、間違ッテオリマシタ」の言えない人達なのか？

§ 5 博士教授制度は廃止せよ

58年前の敗戦そして復興、それから東の間のバブル(好景気)に浮かれた日本は、今や経済そして国自体、**沈没寸前の様相**を呈している。早期発見・早期治療を唱える医師達(博士にして教授)はまるで製薬業者の走狗かと疑う程、癌を完治させる力など殆どない毒作用のきつい高価な抗癌剤を狂気の如く患者に投与して、患者を死に至らしめる。そして**医療過誤の頻発**は目を覆うばかりである。土木工学の博士・教授も、他の分野の博士・教授に負けじと、自らがゼネコンのお先棒を担いでいると知ってか知らずか、**自然を破壊し人間を滅び**の世界へと突き落とす。人々は愚かにも博士・教授を学識経験者として尊敬し愚にもつかぬ意見を有難がる。博士・教授達の思い上がりは目に余り若者達はこの地位を目指して、毎年の大会で土木学会だけでも数千人の発表が行われる。筆者はこの際博士・教授の称号は廃止して、どうしても必要とあれば、大審院を最高裁判所と改めたのに倣って、そのものずばり「**論文合格者**」といった名前に改めることを提案する。

【引用文献】1) 高尾利数「NHKこころをよむ 共生への道をさぐる 異文化の融和は可能か(下)」

日本放送出版協会、2003年、P159